

## 戦後の学生寮

新制大学の発足と旧制大学の終焉とが重複した一九四九（昭和二十四）年から五三年までの時期、本学生数は一挙に二十万人の大打を突破した。こうした学生数の急増を背景として、福利厚生施設として重要な役割を担ったのが学生寮であった。この時期の本学の学生寮は、三七年に取得した練馬区南町練馬グラウンド内に建てられた陸上競技部・ラグビー部・サッカー部の練馬寮、四七年九月に完成した吉祥寺野球場内の野球部合宿所、五一年十二月取得の練馬区向山町の女子陸上競技部寮、および五二年十月新築の阿佐ヶ谷の水泳部合宿所というような運動部の寮で、一般学生のための寮は、練馬寮の一部と府中寮一棟、板橋寮二棟のみであった。

府中寮は、本学工業専門学校の校舎、寄宿舎、実習場とする目的で、東京都北多摩郡府中町の府中製作所敷地約一万坪と工場施設の買収の仮契約が四七年二月に締結されたことから、同年春に木造二階建ての寄宿舎に学生

が入寮したことに始まる。しかし、本学と府中製作所間の本契約がうまくいかず、五三年十一月に閉寮が決まったようである。そのため実質的な一般学生のための寮は、板橋寮二棟のみであった。

板橋寮は四五年十一月に板橋区板橋町六丁目三二四四番地の土地約二〇九坪、木造モルタル塗瓦葺二階建ての共同住宅（旧陸軍用宿舎）二棟を購入し、「学生・生徒寄宿舎用」として認可申請したものであった。

各棟は、それぞれ「朋信寮」「至善寮」と命名され、『中央大学新聞』によると、朋信寮は七畳半が一室、六畳が六室、四畳半が九室、至善寮は八畳が六室、六畳が二室で、四畳半の定員が二人のほかに、すべて定員三人であった。入寮資格者は原則として新入生で、二年目の三月に出寮しなければならなかったが、二年間の出寮期間が来ても、やむをえない事情で出られない者に、臨泊制度というものを自治的に設けて、至善寮では一日三〇円

ずつ徴収し、朋信寮では五日までは無料で、五日以上は三〇円ずつとっていた。

寮費は月二〇〇円で、このほかに入寮の際、寮維持費として朋信寮では二〇〇円、至善寮では五〇円が徴収された。当時米一升二七〇円、六畳一間借りると月三、四千元とられた状況下では非常に安かった。ただ、一ヵ月一人一五〇円見当の電気代は自弁であり、また、便所の汲み取りは、一ヵ月百樽位あって、一樽一四円で一、四〇〇円とられるが、学校から八〇〇円しか出ず、その残りは寮維持費から出していた。

「中央大学寮規」により「寮生を指導監督し建物施設を管理するため」寮監が置かれた。寮監は寮の運営には



板橋学生寮

あまり口を出さず、寮の自治は、各寮三人の寮務委員を中心に行われていた。寮務委員は、学校との交渉その他一切にあたり、近所の理髪店で一二〇円の所を八〇円で、一五円の銭湯を一二円にしてみらうことに成功している。

寮には、食堂がないので外食が原則だったが、一、二人の者を除いて自炊生活をしていた。当時の学生は家庭からの仕送りは一般に少なく、月三千円から五千円の生活費はアルバイトでまかなった。このように苦しいながらも寮で生活をできた者はしあわせで、入寮には実質八倍もの競争をくぐり抜けなければならなかった。

『中央大学新聞』によれば、五三年当時、本学には約二万五千人の学生が在籍し、その半数以上が地方出身者であるため、学生寮の充実を求める声が多かった。同年十二月代々木大山町の自動車練習場跡地に建設される代々木第一寮は、学生の切実な要望に応えた近代設備の学生寮であり、板橋寮時代の終りをつげる出来事であった。